
彼岸の彼方

わかめ頭のわかめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼岸の彼方

【Nコード】

N2490Q

【作者名】

わかめ頭のわかめ

【あらすじ】

人を呪わば孔二つ。因果は必ず大きかれ小さかれ応報する世界の条理。この街ではその節理を忘却した人間が絶えなかった。いくつか常人とは逸した、障害ともとれる特徴を持つ主人公、皇遼は春休みを使い幼馴染である弟切宅へとお邪魔することになる。彼はそこで、今日がちょうど今日が彼岸会の祭りの日だったことを思い出す。其は愛憎と相剋の昔語り――

一日目 『悪夢』

其は鬼嘶き魔咽ぶ夜のことだ。

聳^{そび}えるのは隊伍を組む不気味なまでの木々の陣列。

からず

烏の羽音が蕭蕭^{しょうしょう}とした雰囲気をさらに陰鬱色に上塗りしていく。

黒桐々と茂る林道の隘路^{あいろ}にて、既に埋もれた残夢の続きを視た。



「——ひとつ摘んでは母の為」

森林の闇の中、ヒトガタの双眸は死番虫のように駆け回る。

刻は丑刻。夜半の月が俯瞰^{ふかん}する中で、ヒトガタは静寂を守り続けている。

見かけ十代後半、年相応の人というイメージはしかし、その手に携え持つ器械が破壊していた。

右手に持つのは、一振りの刀。

八十？以上のリーチを誇る、反りの小さい日本刀。製作時期としては江戸時代以降であると見える。高い硬度と鋭利さを保持し、斬ってよし衝いてよしという文句のない性能の代わりに、質量の肥大化などによって扱い易さを犠牲にした、玄人向けの武具だ。

下手をすれば自身の体躯を越えかねぬ刀は既に抜かれており、剥きだしの刃が月光の煌きを反射する。

一切の無駄を淘汰^{とうた}した拵^{こしら}え、切っ先に至るまでのしなやかな刃^{フォルム}、波打つ刃文は乱れ刃。

機能美の髄に君臨する人斬り包丁たるそれは、本来ならこの国では帯刀さえ許されないものだ。

しかし、それに悪びれた様子もなく、極めて落ち着きはらった態度でそこに立つ。

「――ふたつ摘んでは父の為」

刀とは美術品の一端としてその価値があるが、元々は殺害の為に設計された器械である。身体から放つ殺気から、用途は後者であるということとは言うまでもない。

しかし、その殺害対象の姿は未だ見えず。

ただ神経を研ぎ澄ませ、不動の型のまま辺りを視渡す。

不動の要塞を感じさせる無言の威圧に、異形の全身は高揚した。

その姿はヒトガタの背後に位置している。落ちた影で悟られぬように、闇に影を隠し、身を木々で隠す。最早文句なしの完全な死角である。

狩りにおいて奇襲は定石であり、一撃負わせれば後はトントン拍子でカタが付く。獣よりも頭の無さそうな人型の異形は、それでいて生存する為の思考能力は至極のものと言えた。

企画は攻撃一辺倒。

自由落下に脚力を用いた俊足の下降にて、隼の如く刈り取る。

力の籠ったくの字の両脚をバネに、巨躯の魔獣は爆^はぜるように襲いかかった。

ミシリ、と樹が唸る音を耳にする。

それは鳥が留まる音でもなんでもない。ただ？敵？が襲い来る音だ。

獣の殺気など隠れていてもすぐにわかる。未だ人の業が拭えぬ獣もどきならば尚更の話だ。ヒトガタは背を向けたまま跳びかかる？敵？を迎え撃つ。

おそいく
迫る？敵？。

全長二メートル弱の異形を前に、少女は刀を構えることなく見据える。敵前で構える事なく相手に背を向ける。という行為は相手を侮っていると言わざるを得ないことだが、実際はこれで足りているのだ。

突進。

獣の如き迅^{はや}さで疾駆する影は、心臓一拍の時間よりも早くヒトガタに肉薄する。

右手の鋭利な爪を上から降り下ろす。速さは既に人間の反応速度を超越しており、破壊力でいえばコンクリートをズタズタに引き裂く程度は存在するとみて疑いようのない。

一撃必殺。狩り採る為の腕^{かいな}に刺し殺す為の剛爪^{ごうそう}を用いたそれは化物の一撃に相応しいものだった。今もこれからも幾つもの血を吸い続ける畏怖の尖刃。

だが、それにひれ伏すのみのはずの相手が、あろうことか無傷のまま反旗を翻してきたのに気付いたのは、ほんの数秒後の事であった。

ヒトガタは左足を軸に一回転し、連動する動きで、両手に持った金属の塊を振るう。

空を切る怪腕。異形の視界よりヒトガタの姿が消えたと同時に、ソレの気付かぬ領域で刃^{ひらめ}が閃いた。

鮮やかな軌道を描き、咆哮を上げる刀刃は袈裟懸^{けさが}けの斬撃を発現する。

紙一重の回避と同時に異形の腕を裂き、異形は腕が刎ね跳んだ後で斬られたことに気付く。

血潮は噴出することは無い。既に朽ちたものだ。代わりに噴き出すのは腐臭溢れる僅かな黒色の飛沫^{ひまつ}。

異形はその一撃でわずかに怯むが、それは既に条理を超えたもの。腕一本がなんのその、もう片方の手と両足をフル活用し、即座に後方に跳躍。猿のように樹に留まり、双眸が憤怒の色に染まりゆく。それに対し、ヒトガタは最初からそう来ることを分かっていたかのように、緩慢かんまんにも見える静けさで刀を新たな型に移す。刀本体をみぞおち部分から顔の横にまで持ち上げ、刃を上向きにして切っ先を相手に突きつけるその型は、断罪を執行する処刑機のそれに似ている。

異形とヒトガタは図り合うように見つめる。
そこに僅かな静寂が生み出され
ほどなくして、それは破裂した。

異形の企画はまたしても攻撃一辺倒。愚かにも、再び斜め上空よりの強襲を試みる。

爪は全てを狩り取り、顎あぎとは全てを咀嚼そしゃくする。

当たれば即死である。当たりさえすれば。だが、そのまま食って掛かったところで結局あの刀に切り伏せられてしまうのが関の山だ。故に異形は策を講じた。

「……っ」

異形は眼前の獲物が息を呑む声を確認に耳にする。

尻尾にありったけの砂利を乗せて、それを散弾銃の如く撒き散らしたのである。単純な目つぶしだけでなく、内に交じる小石は連続するジャブを打ち出す。

威力は微々たるものだ。だが本筋の一撃を当てる事が出来ればそれでいい。

砂煙のカーテンがヒトガタを中心に出来上がる。眼を潰し、圧倒的に有利にさせた状態を作り出した異形。

異形から相手の姿は見えなくなるが、大体の位置さえ分かれば
いちいち目で確認するまでもない。相手は反射しようのないのだか
ら。

鬼の魔手は砂のカーテンの中に、吸い込まれるかのように伸びて
いき――



はし
迅る痛みで覚醒する。

沈む意識は甘い毒のようで、それに陶然とうぜんとする感覚は異常性の頭
角を見せる。

脳は焼け、身体は果て、魂も朽ちた。

もし、死というものが完全な静止であるとするならば、これ以上
の状態は無いと言える。

虚無感を感じるという矛盾が劈く。

既に無いはずの脳が、今や飾りにすらならない神経が、敏感に『
死』の感情を感じ取った。

無形である故に無表情。

無情である故に無感情。

死神と言う付き人は既に役目を終え、生を糧に新たな死を産み落
とす。

朽ち逝くのみ死が生まれる矛盾が衝く。

非日常の漆黒は荒唐無稽な認識に視覚され、その矛盾性を露呈する。

未知の果てと未知の追憶が
一糸纏わぬ赤色の異形を凌辱する。

! ! ! ! !

そこで、ぼくは。

五臓六腑のそのまた先の、云鬼おにの雄叫びを聞いた。



—

まただ。
すめらぎりよぎようが
汗だくになりながら皇遼は仰臥したまま目蓋を開く。

既にその時には例の悪夢も立ち消えており、眼前には狭い部屋の天井が映っている。年相応の男の部屋と言うべきか、部屋はずいぶんと荒れていた。

「……何なんだよ」

尤も、此処は自分の部屋ではない。それどころか、自分の家ではない。

この部屋はご近所おとしぎりの弟切宅の長男、弟切夷楼おとしぎりいろうの自室であり、そこは最早サブカルチャーが織りなす異界を形成していた。壁一面に張られた、海辺を背景に生える少女たち。

ビキニからスクール水着などの衣装で着飾った浜辺の天使たちが、こちらに微笑みかけたり恥じらいに顔を紅潮させたりしている。ただしポスターの中で。

無論、モデルなどのものではない。その姿は現実味がない美をかもす。

それは我等三次元の世界のものとは異なる、二次元による創作物である。

その部屋は主の趣味を何処までも忠実に投影していた。アニメ、ゲーム、漫画にノベル。多岐にわたって展開される、2Dにじげんのコミュニケーションティ。

そこはその手の者には極楽浄土に勝るとも劣らぬ輝きを持つといわれているようだが、残念なことにリョウはその手の人間に非ずあら。彼らサブカルチャーの人々の言葉で言う『リア充』フィギュアにとってその空間は寒気を催すものだったに違いない。細い肢体を晒した偶像の軍隊に、壁一面に大きく飾られる宗教画ポスター。そこは既に異界の神々を信仰する一つの祭壇となりかけている。

「……変わった趣味してるよな、イロウさんも」

だがこんな別次元の空間の中に居て、彼は何も感じなかった。ただ？変わっているな？という言葉が、脳裏で浮かび上がるのみである。

元々色恋沙汰には疎いし、絵に愛着を持てるような人間ではなく、漫画やアニメ、ライトノベルなるものをあまり読まない性質であったのが第一に挙げられる。

評価もしなければ関心も示さず、世間体を気にするにもこれら異空間を知っているのはこの家に住まう弟切の血の人間のみ。

故に？空気がこんなところしかなかった？という事情が分かっている人間のみが、此処に居るのである。何ら憚る必要はない。ただ、少しばかり変わった場所。そう思うだけで、この程度の淫靡地獄^{いんぴ}は耐えていけるものである。

複数の創作に囲まれたフィクションの城塞を見渡し、一人安堵の息を漏らす。

——アレに比べれば、こんな羞恥晒すよりまだ何倍もましだ。

そう心中でばやいた後、大きく嘆息しつつもベッドから半身を起こす。

荒唐無稽にして人智未踏。一度眠る度、リョウは奇妙な感覚と共に覚醒する。

彼は就寝時必ず悪夢を見るのだ。先ほどのように、滝のごとく寝汗を流すこともしばしばで、時にはショックのあまりに胃が通らなくなる事さえあった。

だが、それほどまでの恐怖を感じても目覚めた時にはその内容が記憶されることは一度として無かった。

完全な忘却とまでは行かぬものの、『ただ嫌なことがあった』という感覚のみが古錆びた精神にこびりつくのみ。

何があつたわけでもない。ただ、慟哭^{どうこく}に似た悲壮感、歓声に似た陶酔感が入り乱れる混沌となり、その若々しい瘦軀の中で駆け巡る。その感覚を、人は何と呼ぶのだろうか？

見た事のないはずのものに既視感が沸く。デジャビュとも違った、確信に近い身体の追憶。

さながら身体と脳が切り離されたような異常な感覚。

「……ホントに、何なんだ」

無論、その問いかけは誰かに対して訪ねている訳でなく、誰の耳にも届かぬまま密やかに立ち消えた。

ふと、ベッドの傍に立つ目覚まし時計をしてみる。デフォルメされた女の子たちを背景に時計の針は七時丁度を指している。

——早く起きすぎたか？

今日は三月十七日。既に昨日春休みを迎え、桜咲く季節、ピカピカな服装を着て希望と絶望に浸る日こそ今日であるが、その一大行事は高校二年になる彼にはほとんど関係のない事だった。

こうして、自分のアパートの近くにある弟切宅にお邪魔しているのも、学年進級の為の準備期間における長期休暇を見計らったのだ。

『ね、リョウちゃん。良かったら明日から、わたしの家に泊まっていけない？』

きっかけは同級生の幼馴染、弟切奈々^{ななみ}の誘いだった。

三月十六日、終業式を終え、家路を急ぐ訳でも寄り道する訳でもなく、ただお互いのペースで駄弁りながら歩んでいたのであるが。

丁度自分の家に着いたタイミングで少女は唐突に切りだしてきた。それはあまりにも唐突で、リヨウは心底面食らう。元々彼女は次の行動が読めないことに定評があるのだが、今回はその至りだ。

本来なら、一考して返すべきであつただろう。が、リヨウはそのことにさして咎めずに、『わかった、行くよ』とオーケーを出す。ほとんど思案せず、具体的に何時まで泊まるのか、さえも決めずに。即答を聞いて奈々深は心底喜んだ様子で、踊るような足取りで家の戸の中に吸い込まれていった。嬉しそうな声でのただいまコールが、締まった戸越しに聞こえてきたのを、リヨウは気付かぬ内に頬を綻ばせる。

元々、アパートで慎ましく一人暮らしをしている身であるため、断る理由などない。それに、彼女の家に行くのも中学の夏から四年ぶりになる。久々の幼なじみの家もいいだろう。

という、極めてケセラケセラな心境でオーケーを出していたのだ。かく言う自分もマイペースな奴だ、と常々思う。が、出来る事なら奈々深の悪影響であると言いつ張りた。

かくして、リヨウは春休み終盤まで彼女の家泊まることになった。しかし無計画さの代償として早速問題が発生する。

彼女の家は木造二階建て、五六十年ものの年季が入った割と広い和風の家なのだが、庭の大きさを重視したり、さらに親の仕事柄物置状態の部屋が何かと多い。

その為、リヨウが寝泊まりしている間、部屋を作っておかなければならなかった。中学ぐらいの時は広い奈々深の部屋に入れさせてもらっていたのだが、流石に高校になってからもそれをするのは聊か以上にまずい。散らかりきった客間で寝かせるのは気が引け、父の弟切征二郎せいじろうの書斎は大切に置いてあるため使えず、最後には現在北米にホームステイ留学中のイロウの部屋が選ばれたのである（父

親の部屋は擁護してきたくせに、彼の部屋だけはすんなりと承諾してくれたことは余談である）。

なんだかんだ言ってイロウの部屋は片付いていた。確かに創作物の魔窟まくつとなっているが、その手の人間には珍しく整理が出来ていた。本は本、雑誌は雑誌、フィギュアはフィギュア、ゲームはゲーム……と、その広い部屋の持前のポテンシャルを最大限に発揮し、見事に乱雑とした空気を感じさせぬ作りになっている。

此処でいい、とリョウが言った途端に奈々深が血相を変えて止めてきた。ある意味客間より入れてはならない感がある部屋なのだ、その反応は当然と言えるが、リョウはそういう面倒な事情を気にしないタイプだ。

此処でいい、と断じて聞かないのを見て、諦めたかのような口ぶりですその部屋を借りることを承諾した。

期間は春休みが終わるまでに決定している。

春休みが終わるのは四月の七日。今から十七日間はお世話になる。

もう一度寝ようか。そう考えるも、また何もわからない悪夢にうなされるのもまっぴらだ。

目が覚めたからには起きねばなるまいと、ベッドから起き上がった大きく伸び、欠伸一つ。

二次元の魔境から立ち去り、階段を下りて洗面台へと向かう。やや古風に作られた二階建ての家は、既に階段を一段踏みしめるごとに軋み声を上げるようになっていた。

しかしその質感はとても心地よいものに感じた。和の落ち着いた感触は足の裏を伝い彼に直接流れ込んでくる。静謐せいひつな川面を連想させるそれに陶然にも似た愉悦を感じ取る。先程の混沌な魔界の口直しには丁度いい。

「やっぱり、和室はいいよなあ」

ポツリ、と。そんな益体の無い呟きを漏らした。
心からの感嘆の音は、密やかに木々の胸の奥に仕舞われるのみ。
だった

「あらあら、そう言ってもらえると嬉しいわ」

が、その呟きに反応する声一つ。

ジジジ……

顔を直視した瞬間、厭な音が脳裏によぎる。

リヨウはそれを振り払い、その顔を見た。大人っぽい声音に整った柳眉が第一印象に合致する。

弟切早苗。
さなえ

弟切奈々深の母親であり、四大家族を支える縁の下の力持ちだ。
とはいえ、父親が仕事柄あまり家に居ない今、彼女がこの家のリーダーとも言える。基本的におっとりしていたり、いつもニコニコしていたりと優しい人であるが、叱る時には叱り、善悪を的確に見抜きそれを指摘できる芯の強い大人だ。

「あ、早苗さん。おはようございます」

「ええ、おはよう。朝は早いね、リヨウ君は」

彼女は年齢では三十代のはずなのだが、その若々しさは高校生に交じっても違和感が沸かないほどである。

尤も、複雑な事情ということもあるかもしれないが、なるべく考えたくないものだ。

妙な方向に思惟を巡らすリヨウは、お世辞のような相手からする

と多分本気なのだろう言葉を受け、少しだけ言葉を詰まらせる。
息苦しいという訳ではなく、厭な事を考えてしまったためだ。

「まあ、そういう風に出来てしまったんで」

努めて笑みを作るリョウ。そういう風に出来た、とは事実だ。
言うまでもなく悪夢の影響である。

人間だれしも眠らずには生きていけない。特にリョウのような育ちざかりの人間にとって睡眠とは三度の飯に匹敵する重要さを持つ。眠いと感じれば寝る。その先に何が待っているようと、意地でも眠らなければならないのだ。

「今から朝ごはん作るわね、ちよつと散らかってるけど少しそっちで待っててもらえるかしら？」

そう言って早苗はキッチン近くの居間を指す。

そこは中学時代より彼が好んで行き来していた部屋だった。

畳張り、紙障子で出来た和室だった。テレビなどの機器がその雰囲気介入している所もあるが、とてもじゃないが散らかっているなどとは思わないだろう。

ただ、彼女の夫は元々何かと和洋混合を嫌っていた所がある為、そこでよく散らかっているといわれる。リョウ自身もそういうことは少しぐらいならこだわる性質なのだが、流石に征二郎には劣るようだ。

「何か、お手伝いしましょうか？」

「いいのよ、私こういうのが趣味だから。そうね……強いて何か頼むなら、料理が出来上がったら食器を持って行って貰えないかしら？」

「わかりました。じゃあ、テレビでも見ておくことにしますね」

軽くお辞儀をすると、可笑しそうにくすくすと笑って「いいのよ、そんなにかしこまらなくても」と早苗はリヨウに催促する。

リヨウは、軽く笑ってみせると和室の奥へ入っていく。

畳が一面に敷かれている。六畳はありそうな部屋だ。

ところどころに細緻さいちに彫られた木々が見つけれられ、やはりそこにも和の安らぎが充満していた。

その畳に正座して、テレビのリモコンを手取る。

こんな時間だ、どのチャンネルも朝のニュースや天気予報が大半を占めている。だが、自分には朝のニュースなどただ流れ込んでくる雑念でしかない。

チャンネル変更を繰り返し、朝の天気予報を探す。

と、その途中。チャンネルを操作する指が唐突に止まる。

ブラウン管越しに移る朝のニュースの映像は、最近話題の謎の怪事件の議論を映していた。

その名も『スクープ！ 現代によみがえりし鬼の怪異に迫る！』。

「なんだ。胡散臭いとか、そういうレベルじゃないなこれ」

小馬鹿にしたような口調で呟く。その通りであった。それは滑稽と呼ぶに相応の眉唾物で、それゆえに面白いと勘違いして取沙汰している所も多いのだろう。

事実、そう思って今チャンネルを変えずにそのまま観ている自分も居る。噂好きな人間向けに設えたコーナーだけあって、流石根深過ぎずうわべだけでない初めて見る人向けに掘り下げられていた。

『近年多発している連続猟奇殺人事件ですが、これについてどう思いますか？』『これはまず人の行える殺人ではありません。現場に

は蹄のようなものがいくつも残っていますよね、あれは鬼の足跡ですよ。人間が素手で人をあんな風に解体できると思いますか?」『それを直接鬼の实在の立証に使うのはナンセンスですよ。そうでない可能性が圧倒的に高い』

「……………」

黙したまま、つまらないものを観るような眼でじっとテレビの映像を眺める。

鬼。

それは人ならざる異形。肉を喰^はみ骨を貪^すり血潮を啜^すって夜を明かす。

畜生の道を往く、人の空想が産み落とした蛇蠍^{だかつ}の体言。

古より人の畏怖の対象となっているそれは、現実に存在しえない空虚な信仰の残影だ。

だが此処最近、よくその話題を耳にするのはこの街を中心に起こる事件が原因となっている。

所謂、猟奇殺人というヤツである。

人体がありえない方向にねじ曲がっていたり、骨が細切れのまた細切れになり血に溶け合っていたり、全身の血がすべて撒き散らされた状態で臓物のみが残されていたり、現場の複数に妙な形をした蹄があったり、と。鬼の所業としか思えない殺人事件が多発しているのだという。

しかも此処には古来より鬼の伝説が語り継がれているだけあってさらに性質が悪い。マスコミは良いネタに群がるように取り上げ、地方の局ではもう大騒ぎ。たちまち話題はインターネットやテレビ、口コミなどのコミュニティによって席卷^{せっけん}し、世間に『正体不明の殺人鬼』『実在した鬼』などという陳腐な話題を振りまいているのが現状だ。

「それにしあって、なんでこんなに警察の情報管理はザルなんだ。

圧力掛けないのか？」

呆れた声を出し、ため息を一つ。悲惨な殺人をこんな面白おかしく公表する事への憤りが三分、それが人の性だと諦める落胆が七分。何時か自分の所に来るのではないか、という危惧は、不思議な事に一分も沸いて出なかった。

天災と同じだ。たとえ傍でどんな嵐が起こっていても、日本人と言う生き物は危機感を感じない。感じている錯覚はあったとしても、それから避難の実行に移すには実害をこの目で直接見なければスITCHが入る事は無い。

平和ボケしているのだ、要するに。どうしようもないほどに、平和のぬるま湯に浸かりきって、既に危機を危機と感じる事さえ難しくなっている。

そして、そう論じて達観している気になっている自分も……

「ふわああああ……お、はよ………」

平和ボケに関しての話題を並べていると、リヨウの中でその筆頭に沸いて出てきそうな少女が戸をあけて現る。

リヨウはそちらの方角を見て、やれやれ、といった具合の表情で少女の姿を双眸に捉えた。

見紛うはずもない。茶髪の髪は、今は寝癖によって見るも無残な事になり、顔も寝ぼけオーラを最大限にまで発揮し、服装はピンクのパジャマというファンシーな格好をしているが、挙動や仕草といえばまるきり彼女のもの。

ジジジ……

直視の直後、脳裏に発生するノイズ。

それを瞬き一つでリヨウは振り払い、返事を返す。

「おはよう……奈々深。とりあえず顔洗ってきたら？　なんていうか、その。色々とスゴい事になってるし」

そう、キングオブマイペース（※クイーンでないのはあくまで仕様）と名高いお天気少女、弟切奈々深その人である。

そのマイペースぶりが打ち立てた武勇伝は数知れず、校内では既に生きる伝説と化している。

まともに相手していると身が持たないと評される彼女は、やはり中学時代と変わらず寝起きは最悪だった。

何か、片手にぬいぐるみの手を掴んで引きずっているのがその証拠だ。

「あれ？　リョウちゃん……？　なんでウチに居るの？」

「あのな、お前が僕を呼んだんだろ？　それぐらい忘れるなよ。――あと、リョウちゃんってのはやめて。ホントに」

いきなり発せられる寝ぼけ発言を、ため息交じりに咎めた。

それはともかくとして、彼には最早すっかりリョウちゃんという名前が定着してしまっている。

確か小学生ごろからずっとその名前で呼ばれていたような気がしたが、リョウ本人としては子恥ずかしい事この上ない。

「えー……そうだったっけ？　ねえ、アベさん？」

夢現ゆめうつのまま、手に持った人形の両手を持って一人芝居に興じる奈々深。

ちなみにアベさんというのは彼女の持つクマの人形の事だ。元々

は名無しのクマのぬいぐるみで、中学時代か小学校後半期に旅行のみやげとして買ったものだ。

ベアを反対向けに読んだらアベだった、ということから何を思ったのか「うわーお、ベリーベリーだんでいー！」というかまびすしい快哉の声を上げ、即座に名無しのクマはそのストレートな名を賜^{たまわ}る事になったのだ。

やれやれ、と嘆息を一つ零すリョウ。まるきり変わっていない彼女の事は、果たして喜ばいいのか叱咤すればいいのか。

「あ、リョウちゃん。今日、何の日か覚えてる？」

再び会話をかき乱す奈々深節炸裂である。唐突な話題変換に慣れるまでリョウは二年の月日を要した。普通の人間であれば半年で慣れるそうだが、そもそも半年もなければ慣れられないというのはどうだろうか。

「知らない。急になんだよ？」

「もう、忘れちゃったの？ 今日だってば、今日！」

だってば、と付け加えられても分からないものは分からない、というのが彼の率直な意見だった。相手の言わんとしていることを理解すべく、頭の中を徹底的に洗う。

春休み。行事。長期休暇。休日。祭り。春分。三月十七日。

いくつものワードが不規則に浮かび上がり

「あ」

不意に間拔けな声を上げ、追憶を終える。

三月十七日。今歴に置ける彼岸会^{ひがんえ}の初日である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2490q/>

彼岸の彼方

2011年1月26日11時53分発行